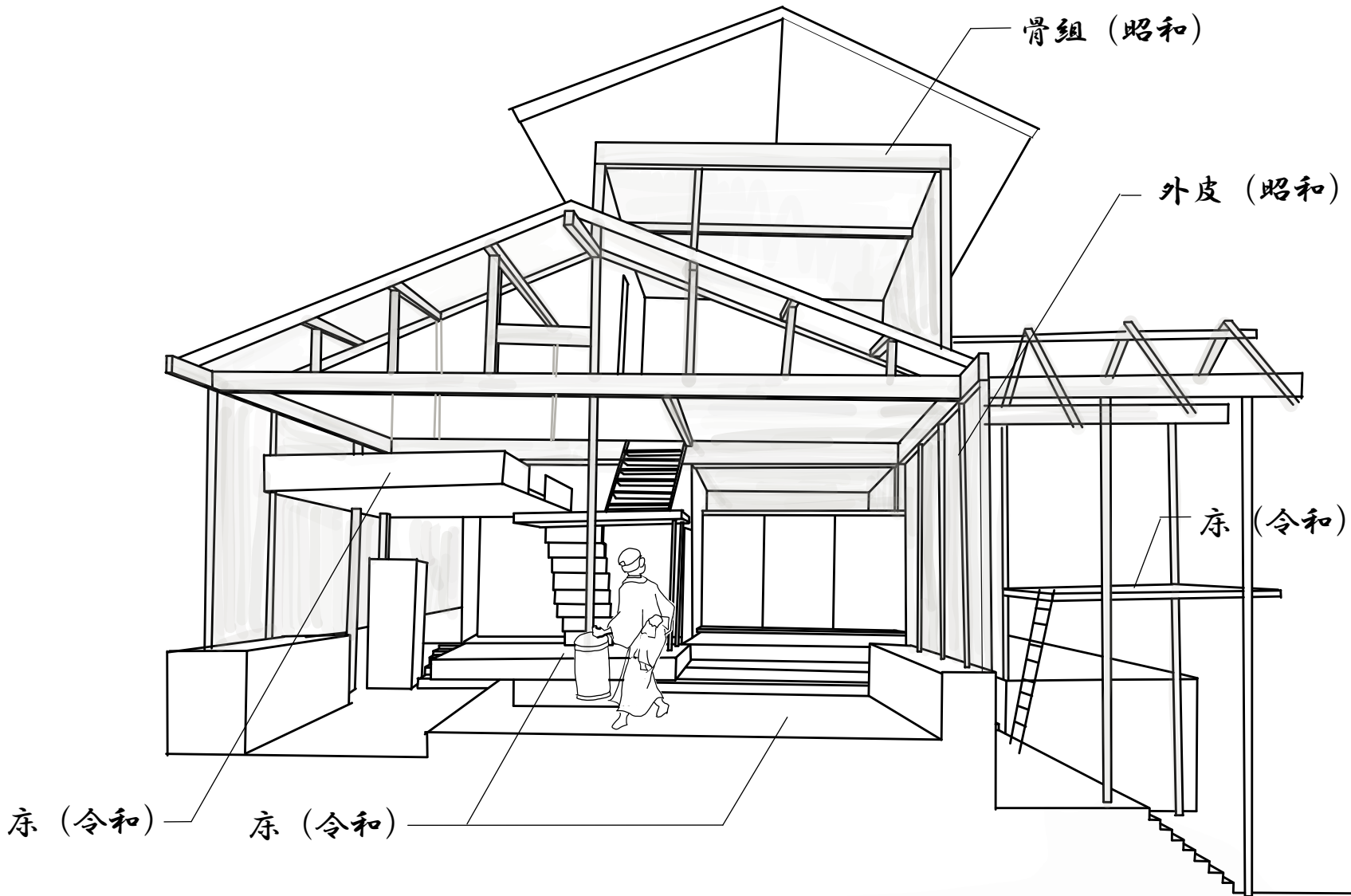


つもりて遠きむかしを 眺める建築



ここを新しい世代の

住まいとするにあたり、

現代の暮らし方や将来の変化という

機能的な条件整理のほか、

先代との距離感が大切と考えた。

近すぎて同化する訳でなく、

過去の意匠を飾り物として

陳列するでもない。

先代からの営みを感じながらも

新たな世代を主人とする歴史を

重ねて行く器としたい。

ここでは、風雨を凌いできた外皮、

構造を支えてきた骨組みを、

文人とその家族が過ごした

痕跡として残し、

新たに挿入する床から

それらを景色として眺める構成とした。

住まいの中に家族の居場所を散りばめ、

かつどこか互いの気配を

感じながら過ごす。

そこに先代の香りがほのかに漂えば、

過去から未来に積もって行く日々を

大切に感じられはしないだろうか。